

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」
第7回 次 第

令和3年4月13日（火）
17時～19時（予定）
三鷹産業プラザ 705 会議室

- 1 三鷹教育・子育て研究所所長 三鷹市教育委員会教育長挨拶
- 2 今後の検討事項について
- 3 鷹南学園三鷹市立東台小学校（ハイブリッド型学習研究開発校）の取組について
- 4 意見交換 三鷹の子どもたちに育むべき資質・能力について
- 5 事務連絡

【配布資料】

- 1 今後の検討事項について
- 2 中間報告関連の取組について
- 3 対面授業と家庭学習の一体化（ベストミックス）を目指して
- 4 参考資料
- 5 今後の予定について

参考1 中間報告概要

参考2 中間報告

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」
(第7回会議録要旨)

日 時 令和3年 4月13日(火) 午後5時～7時
会 場 三鷹ネットワーク大学
出席者 後藤 彰(座長)、阿原 あけみ、緒方 一郎、宮崎 望
オンライン出席-木幡 敬史、佐藤 量子、柴田 彩千子、相馬 誠一、常盤 豊、
林 寛平
事務局 三鷹市教育委員会事務局、三鷹ネットワーク大学

〈議事要旨〉

(注) この会議録は抄録であり、すべての発言が記載されているものではありません。

1 三鷹教育・子育て研究所所長 三鷹市教育委員会教育長挨拶

・・・・・・・・・・・・・・・・・・貝ノ瀬教育長

前回おまとめいただいた中間報告書は、大変評判が良い。議会、一部の関係者と議論したところ、これが実現できるといいと。できる限り、研究員皆様のご意向で、実現できるように事務局の方も頑張りたい。特に、これからの教育はウェルビーイングを目指すということ、それから個別最適な学びということでデジタル技術を活用して、いかに子どもたちへの指導や、それから、学習の成果の把握に対応していくか、協働的な学びを具体的にどう実現していくかというようなことが、実際に実現できるように仕組みを作っていければと思っている。またできれば丸ごと学校を立て替えて建物の空間的なスペースも含め、中身も一新して、実現できたらいいと思っている。市長も前向きに考えていただいているので、時間がかかっても、皆さまの思いをさらに応援をしていただき、実現に近づけるようにしたい。

その中でも学校三部制ということが出てきている。放課後の子どもの単なる居場所というようなそういう言い方ではなく、価値ある体験、経験を、放課後の時間帯できちんと保障できるような学校のあり方を考えたい。それから学校の夜の部というか、大人の学びも保障できるよう、多様な方々が今までは子ども中心で考えてきていたが、障がいのある人もない人も、男性も女性も若い人も年寄りも、外国の方も、そういう多様な人がそこに集って学びができる。みんながワクワクしてそこに集ってつながりが持て、そして充実した時間が持てるような学校を、ぜひ構築したい。今年度、本研究会はまとめに入るが、さらに肉付けしていただきたい。引き続きよろしく願います。

2 事務局から配布資料の確認

事務局から配布資料5点を確認。

3 今後の検討事項について

事務局から資料1、資料2に基づいて説明

4 鷹南学園三鷹市立東台小学校（ハイブリッド型学習研究開発校）の取り組みについて ・・・・・・・・・・・・・・・・鷹南学園三鷹市立東台小学校校長 山下裕司

今日は本校の実践を紹介する貴重な時間をいただき感謝する。本校は昨年度三鷹市 GIGA スクール構想ハイブリッド型学習研究の2年間の研究をスタートさせた。昨年度末に1年目の研究のまとめとして、お手元にあるリーフレットを作成し、紙面発表させていただいた。今回は本校の研究の内容を中心に、管理職として経営戦略の中で、この研究をどのように進めていくのかをプレゼンさせていただく。

変異種の拡大によりコロナのネガティブな影響は依然世の中の脅威である。しかし、教育界では、ポジティブな影響も受けている。政府のGIGAスクール構想では当初、2022年に3人に1台のICT端末の整備を目標とし、2023年には1人1台の完全整備を掲げていた。この構想が加速的に進展し、三鷹市ではすでに、この整備が完了している。

加速的な進展は1人1台端末の整備だけではなく、授業改善の根底にある、オーセンティックな学びの必要性を加速的に高めたと言える。つまり、子ども一人ひとりの学習改善を図るために学びそのものに着目する必要があるということである。

では、オーセンティックな学び、オーセンティック、真の本物の学びとはどんな学びであるか。子どもたちがその学習に価値を感じて自ら学びたいと思う学びである。そのためには、生活に密着し、考える必然性をもたらす問題提示が欠かせない。子どもたちが一人ひとりの見方、考え方が分化し、対立し、困惑する。このような知的葛藤から、一人ひとりの問いが生まれる。

この問いを一人ひとりが解決したいという気持ちから、探究心が生まれる。そこには、主体的に学ぶ必要性、必然性があり、解決するための対話が有効となる。このように、教科の本質に迫る協働的な学びが実現される。この問いからそれぞれの探究により学びを進めることが、学習の個性化となる。教師は指導の個別化が図れ、また、問題解決において協働的な学びが往還される。これこそが、令和の日本型学校教育であり、これが、オーセンティックな学びである。

本校では2年間、算数科を通して年間講師の玉川大学教授柳瀬泰先生を招聘し、基礎研究を進めてきた。この研究中、新型コロナウイルスのパンデミックにより、臨時休校を余儀なくされ、学びの危機を感じた学校では、学習課題の配布に懸命となった。プリント爆弾と揶揄されながら、本校では、この研究の耕しもあり、量より質を求め、子どもたちが選択探究できる課題を提供した。どんな状況であろうとも学びを止めない。これは学校教育に求められる最大の課題である。

しかし、学びを止めないとはシステムや環境の整備なのだろうかとは私は考えた。そして、たどり着いたのが、子どもたち一人ひとりが自律的に学ぶ姿を育成すること。この姿は簡単に育成することはできないであろう。画一的に育成するものでもなく、個に応じて時間をかけてじっくりと醸成するものである。学校経営の中で戦略的にこの姿を育成するために、本校では、令和3年度の組織目標として掲げた。掲げただけでは絵に描いた餅。常に教員が意識できるように、キャッチフレーズにした。セルフ・マネジメント・ラーニング、この頭文字をとると、SML そうです、服のサイズと想起することで、全員意識化した。そして、この組織目標を具現化するためには、家庭の協力が不可欠である。そこで、ハイブリッド型学習研究を今年度の重点政策とし、経営戦略的に家庭と連携する。高校や大学では感染防止対策として、オンライン授業と対面授業を組み合わせるハイブリッド授業が主流となった。これは単なる授業形態のベストミックスである。本校では、この学びに着目し、対面授業と家庭学習の一体化、ベストミックスを目指し、組織目標に迫ろうと考えた。ハイブリッド型学習研究で欠かせないのは、この1人1台のタブレットである。子どもたちがノートや鉛筆と同様に学習の道具として使うのだが、ICT機器を活用することが目的ではなく、オンライン機能を有効活用し、組織目標である自己の学習を調整しながら学びに向かう姿を目指す。ハイブリッド型学習においては、対面授業において、コンピテンシー・ベースの授業を展開し、子どもたちの汎用性のある力を育成する耕しが前提となります。また、家庭と連携を図るためには、保護者にも単なる知識技能の習得を目指す学びはなく、探究する学びの重要性を理解していただかなければならない。そこで、タブレット端末が対面授業と家庭学習の架け橋となるように、オンライン活用の4つの視点を考えた。このことにより、教員は授業作りの視点が明確になる。そして家庭では何を協力すればよいのかがわかりやすくなる。これで強固な連携が図れる。この研究の屋台骨ともいえるオンライン活用の4つの視点がこちらである。それぞれの視点についてご説明する。

視点の1は振り返りである。限られた45分の授業の中でとても価値のある協働的で真に深い学びが実現されたとしても、時間内に収めようと、安易で画一的なまとめをしてしまったのでは、この授業の価値も半減する。そこで、家庭学習でここにノートやタブレットからこの時間の学習をじっくりと振り返り、オンラインツールであるGoogle クラウドを活用し、課題を提出するのである。担任は個の実態が把握でき、次の授業作りに生かすことができる。

視点の2は、探究である。まずAは、学校から授業の終わりや、オンラインで問題を投げかけ、家庭学習で一人ひとりに問いをもたせる。対面授業ではその個の問いからすぐに主体的対話的な問題解決に入る。このことでじっくりと協働的な学びに取り組める時間が確保できる。さらにBとして、対面授業で生まれた新たな問いを家庭学習で個々に探究するのである。つまり、発展的な探究学習である。

視点3は反転学習。例えば国語の文学教材には、新出漢字や意味調べなどは予習で行う。そして、対面授業ではすぐに問題解決学習に取り組む。また算数の計算単元では既習の計算

を復習し、新しい計算単元について問いをもって対面授業に臨む。

視点の4は補習定着の視点である。学校で自己の学習状況、習熟状況を把握し、自己の課題をもち家庭学習でAIドリルや動画コンテンツなどを活用し自学自習に取り組む。個に応じた能動的な補習定着の学びが確立できる。

この4つの視点を各教科の単元計画の中で生かすことができれば、対面授業と家庭学習を一体化させた学びが実現できるのである。かつての宿題の概念を覆し、次の授業に必ず生かされることから、子どもたちの能動的に、楽しい学びを作り出せるはずである。

ここで昨年度の実践を一つご紹介する。6月に行った6年生のオンライン補習の実践である。視点の2のAの事例。まず、画面のように、担任がオンライン補習で今日の運勢占いと題して、このような問題を投げかけた。

この5つの数字の中でどれか一つを選択させる。そして、その数だけ、マスを進めさせる。例えば7を選んだ子は、7から、1 2 3 4 5 6 7となるわけですね。この赤の部分になり、そこで色占い、緑はアンラッキー、白は普通、赤は大ラッキー、青は中ラッキー、黄色が小ラッキーとなる。13を選んだ子どもも、1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13となる。実は、オンラインの向こう側、家庭にいる子どもたちが全員選んだ数のマスを進めて止まった色で歓喜の声を上げている。

なぜなら、全員が赤の大ラッキーだからである。ここからが一人ひとりに問いをもたせる場面である。なぜ全員が大ラッキーになったのか。ここで一人ひとりの考えが生まれる。A君は5で割ったあまりに注目した。そして、このカラクリがわかったのである。そのことからもっとこのマス目を増やしても考えられるのではないかと思いつき、このような32で割ったあまりに注目する図を考え出したのである。自己の問いから、発展的な考えまで行き着いた。この考えを持って、学校の授業に迎える。対面授業では、一人ひとりの問いからどうして全員が大ラッキーになったのか、対話的な学びで解決した。その中でA君の発展的な考えが称賛され、他の子どもたちが、いやもっとできるのではないかと考えた。

まさに探究視点のAの問いをもつ。家庭で問いを持ち、そして対面授業で主体的・対話的な問題解決を図り、さらにBの過程で、各家庭の探究に繋がる授業であった。このように学びはずっと連続する。そしてこの学びを連続させるのは、対面授業と家庭学習のベストミックスなのである。

昨年度の研究は、本校の研究所に稲葉主任教諭の実践をもとに、理論を構築し、研究を中心に進めてきた。今年度は、この研究組織を個々の研究組織、組織として浸透させ、経営戦略的に教員のアイデアを聞き出す。そこで、今までの横の組織に加え、縦の組織を編成して、確実に研究を深化させていく。子どもたちの学びへの思い、先生たちの指導での願い、この両者を実現するために大いに活躍が期待できるのが、タブレットの活用である。確実に成果を上げるために、まず算数科にしぼり、教科の本質に迫りながらベストミックスを考えた単元開発をする。そして、この単元開発は必ず他教科に反映される。さらに、それぞれの学校のカリキュラムにもこの考えが応用できれば、各校のオリジナルな実践が期待できる。

以上が、私の経営戦略的な研究推進の全貌である。子どもたちの学びの向上、真の学力の向上を目指し、学校と家庭が一体となって取り組めば、この子どもたちの学びが大人の学びへと波及していくことであろう。そうすれば、大人の学び場として学校の校舎の活用が注目される。やがて学校が地域の人々の生涯学習の場へと発展する。

そのことにより、地域のネットワークは学校、学園を中心として広がり、三鷹市全体のGIGAスクール構想の進展が三鷹の街をつくるのである。まさにこの研究は、スクール・コミュニティの創造に一石を投じる戦略なのである。ご清聴に感謝する。

<意見交換>

○後藤座長：非常にダイナミックなスケールの発表を拝聴させていただいた。委員の皆様、ご質問等いかがか。

○木幡研究員：非常によいプレゼンを聞いて山下先生の気合がビンビンと伝わってきた。それで、全体的にこの方向性でこれから進んでいくのであろうという明確な指針というか、方向性としてはこうなのだろうと思える。私も同感な部分が多々ある。この中で進めていくにあたって、Google クラスルームを使ってつないでいくというお話があり、その中で実際私の大学でもかなり Google クラスルームを使い始めている。

質問の意図としては、Google クラスルームを使うと、私自身も 100 人 200 人の学生を Google クラスルームで管理していて、コミュニケーションがすごく取りやすくなった。個別の学生とこれまで紙でフィードバックの用紙を書かせていたのが、Google クラスルームであると、直で入ってくるのでかなり簡単に子どもたちとコミュニケーションが取れるようになった。反面、一方でこれをやるとどうなるかという、個別の子どもたちに個別最適化というように、どうやって子どもたちにコメントをするか、出てきた課題に対して、ここのいいよね、もう少しこうやってみたらどうだろうとか、その子どもたちの感想が今度はわっと出てくる訳で、できる限り応えてあげたい。そうなると、先生たちは、先ほど組織体制があったが、評価とかフィードバックの方法というのを、1人が多分抱えきれなくなるぐらいの情報量になってくると思う。しかも Google クラスルームを使うと細かいところまで、評価クリック設定ができるようになるので、どういう視点であなたの課題を評価しているよ、どういうポイント付けをしているよということが問われてくる。そのあたりの部分を今のうちから見越して、この評価や、フィードバックをどうやっていくか。これは保護者にも多分関連してくると思うことなので、子どもたちが出した課題に対して先生がどういうコメントをくれていてどう評価されているかというのが Google クラスルームであからさまにわかってしまう。その部分がこれから合わせてコンテンツをどう組むかということと、評価の枠組みをどうするかということ、今まで丸つけて返せばよかったが、結局これどういう評価の枠組みにするのかということが確実に出てくると思う。その辺りを組織体制として先生 1 人がコメントのフィードバック返す体制にしておくと、ものすごく大変なところがある。自ら 1 年間やってみて、実感がある。そういったところについて、今、山下先生の中で

お考えの部分はどのようなものがあるのか。

○山下校長：本校も、これから、この具体的な実践に入っていくが、確かに今先生から言われたように、今研究主任の稲葉はほとんどコメントを返している。今、6年生の担任もしており、授業に生かされるように考えているので、やはり一人ひとりに対するコメントとかがすごい。確かにこれが全員できるかという、やはり問題があると思う。我々としては、これを組織チームとしてやっていくので、その辺も研究では実践部という部を作り、それをこれからどうやって一般化できるか、他の先生でもできる方法を考えていくことは課題ではある。

ただ、まだ始めたばかりなので、今手探りの状態であるが、とにかく今言われたように、単なる点数ではない。教員も、評価イコール評定と思っている教員が非常に多い。私は、評定は評価の一部であって、本当に評価というのは見取ることだと。一人ひとり理解してあげることだと。その一つがGoogle クラブルームであって、別にノートであっても構わないわけであるが、今言われたようにこの機能はすごく、どこでもできる、どこでも提出できる。

教員の勤務時間という問題もある。

本校で2月にリモート授業チャレンジというのを各学年3回行った。その中でGoogle クラブルームに課題を出し合ったりした。先生が勤務時間外、つまり土日で返したということがあって、それが保護者から、もうそんなだったら、ずっとタブレット見ていなければいけないじゃないかというお叱りを受けた。やはりその辺はわきまえてやる必要があると思っているし、個々の評価についてもチームで考えていきたい。

またいろいろご教示をよろしくお願ひしたい。

○木幡研究員：やはり、フィードバックはすごく大事だと思う。やはり、履修者がどれだけ多くても、一人ひとりにコメントを返すというのは、学生もやはりすごく嬉しいみたいである。これを慶応大学で実施した授業だと一人ひとりにコメントを返すなんてどれだけ優しいのか、みたいなことが返ってきた。そういうことは学生にとってもすごく嬉しいことだと思うので、ただそれを負担にならないレベルということを見ると、私が言いたいのは、学校にその機能だけをきちんとあらかじめ少量のものとしてセットで評価とかフィードバック機能というのを設け、学校に全部任せるとい、現状の体制ではなく、もう少しサポートというか、フィードバックをする視点を持った人というのをこの新しいシステムに伴って、新しく発生するお仕事ではないかと思っている。市教委等でサポートしていくというのが私はひとつある可能性として、令和の時代の中での新しい学校の教員体制として必要かと思う。

○後藤座長；他に皆さんいかがか。

○柴田研究員：とてもワクワクするようなプレゼンであった。シュタイナー教育のようなものをこういうタブレットを使って学校、教育現場で実現できるというような内容のものにすごくワクワクして伺った。

一つ伺いたいのだが、教員研修、校内研修がどのような形で行われているのか。それから、

やはりどの担任の先生が受け持ってもどのお子さんにも同じように、こういった教育内容を実践していくということが、やはり公立学校では必要だと思うので、例えば他校から来た先生がこういった校風に馴染んで行けるかとかそういったいろんな問題があるかと思うので、例えば教材をどこかで蓄積していったり、誰もが活用できるようにするシステムとか、外から赴任してきた先生が取り組むには最初どうすればよいのかとか、そういった配慮が必要だと思うが、その辺をどのようにお考えであるか。

○山下校長：まさしく本校で、今年度、54名の教職員中22名が新しくなり、ほぼ半分変わった。私は、これはいい機会だと考えている。この研究が始まったのは、貝ノ瀬教育長から冒頭あったが、このコロナの中で、まず、研究主任からオンラインで補習できないかということで企画書を作り、それから始まったのだが、何しろ手探りの状態である。ただ私は、やはりツールなので、理念というか、その理念はもう基本的には授業の本質に迫る授業、コンピテンシー・ベースの授業、これが前提であって、ハイブリッドがそこに家庭と連携できるツールとして考えている。なので、4つの視点が本校の考える一番の目玉というふうに考えている。全国にはGIGAスクールが進展し、このタブレットの活用方法についてはごまんとあるわけであり、そこはいろいろ自己研鑽をしたり、それこそ研修なども、本校は独自で校内研修を実施している。研究主任が中心となって、時間のないところをカフェテリア研修という形で、ざっくばらんに意見交換ができたり、教え合うことも実践している。そんな中で今後作り上げていく視点で、先ほど説明した中であった、算数科に特化しているということで算数の教科の本質に迫る、もうそこは欠かせない。子どもたちがやはり学びの本当の楽しさ、知識技能ではなくて探究していく楽しさ、そこをベースにしているので、これを今年1年でまとめて令和4年2月25日に研究発表を考えている。これから進めていきたいと考えている。

5 意見交換

事務局から資料4に基づいて説明があり、その後、意見交換が行われた。

○後藤座長：それでは資料4等を参考に、子どもたちに育むべき資質能力、人間力、社会力、すでに資料の3ページ、これをもとにして、何か新たな視点あるいは強調することもあるかと思う。先程の山下校長のお話に出ていた様々な子どもたちの学習を調整する力もあるし、どうぞ、様々な意見を出していただけるとありがたい。皆さんいかがか。

例えば座長から突然の指名で恐縮ですが、山下校長先生、せっかく発表されて、あれだけの発表であったので、これからの子どもたちに育みたい力ということで、山下校長先生からこういう力がというようなところで話をいただけないか。

○山下校長：先ほどのプレゼンにもあったが、私は、自己調整しながらという自律的な学びというのは、これがあれば例えば、このコロナだけではなくて、どんな災害有事が起きたとしても、自分で学び続ける人間が育つと。そして前向きに、目標をもって生きていく力をもてると思っている。そこで我々も1年間研究を重ねてその自己を調整するためにはメタ認

知する力、自分を客観的にみる力がまず必要だと。そして、あとモチベーション、動機付けであり、そして、その振り返りである。ということで、メタ認知力と振り返りとモチベーション、この3点の力である。

三鷹市は、埼玉県の学力調査の方式を取り入れ、ちょうどそこに、学習方略や学習の仕方ということで、そこに視点が当てられているこの方式は、すごく共感する部分がある。どうしても学力というと偏差値だとか平均値だとか、個よりも全体のバランスということで見るのだが、三鷹市はその一人ひとりの伸びを見るということで、私はその自己調整するためには、先ほどのメタ認知と学習方略とは大切な要素だなというふうに捉えております。

○後藤座長：急なご指名であったが、貴重なご意見を頂戴した。メタ認知であるが、これは私も今、大学生を教えていても強く感じていて非常に重要かと思う。他に研究員の方いかがか。

○林研究員：本当に素晴らしいと思ったことと、子どもたちに求める資質・能力ということもあるが、今ご発表のあった先生方の危機対応というか、主体性というか、そのコロナで何とかしないと、というときに多くの人は様子見で止まってしまうところが、自分たちで何とかしようというふうに動くその姿勢、態度というのか、そういうところがすごく見習うところがあると思った。もちろん子どもたちにもそういう姿勢がつかれば良いと思うが、やはり子どもたちは先生の背中を見ていると思うので、もうやろうよ、一緒にやろうよというふうになっていくということが、すごく子どもたちにとって何よりの教材ではないかなと思った。またそれを上手く乗せて動かしている校長先生と、その校長先生をさらに上手く率いている貝ノ瀬教育長がいらっしゃるのではないかと推察した。

○後藤座長：引き続き皆さんいかがか。学習面だけでなく生活面もあり、少し話が広がっても結構である。

○常盤研究員：山下校長先生の話をととても興味深く聞かせていただき、素晴らしいと感じた。今もお話で、これからの子どもたちに絶対にメタ認知力とか、振り返り学習方略、それから動機付けということがあった。お尋ねも含めてコメントしたいが、そのメタ認知や学習方略、振り返りというのはどちらかというスキル的な部分に近いような感じがする。それと、動機付けというともっと違う心情的なものと思っている。そして、その中で特に動機付けをどういうふうに進めていくのかというところを伺いたい。私が考えるには、動機付けということの前提として、やはり、なぜ学ばなくてはいけないかということがあり、それをさらに遡ってくると、人間力とか社会力というか、人間としてどう生きていくのかとか、社会とどう関わっていくのかということがあり、初めて学ぶことの意味みたいなことにつながっていくのではないかと思う。ただその観念的な流れと別に、もう少し感覚的なものとしての意欲というものもあると思うので、実際に三鷹市の場合、探究学舎で興味開発みたいなことにこれから力を入れていこうとされているが、学校の先生、校長先生の立場として動機付けや興味開発について、具体的にどういうふうに所属の先生方に対して、サジェストされていこうとされているのかをお伺いしたい。

○山下校長：私は、1時間1時間の授業が、これが何に役に立つのか、子どもたちがもし役に立たない授業だったらやめた方がいいのではないかといつも思っている。それが今回の学習指導要領で見方・考え方を働かせるという部分である。この授業を通して何に役に立つのかという、子どもたちがその目的と文脈を理解して学ぶ。まさしくそういう授業が、提供されなくてはならない。本校では、導入の工夫ということに視点を当てて研究をスタートさせた。その導入には、それぞれの発達段階がある。知的葛藤を生む導入でなければ、ただ単に先生の話術が面白いだけに過ぎない。それでは本当の真の学びに繋がらない。知的葛藤、先ほどのプレゼンにもあったが、対立したり、分化したり、葛藤したりという部分で、そこで子どもたちが一人ひとりみんな違った問いが生まれて、我々はその一人ひとりの問いから出発して、その子たちが、自己実現できるようにする。最初、マップとガイドという考え方を柳瀬先生から教えていただき、マップとガイドを形にすることを考えたが、これがマップだよ、これがガイドだよとしてしまうとやはり画一的である。結局、型にはめられたルールに敷かれた授業にしかならない。今考えているのはそうではなくて、一人ひとりがもった問いから発して、そしてどうやって解決していったらいいのだろうと考える。すると必ず対話が生まれる。一人では解決できないので協働的な学びの必然性が生まれる。そしてこの単元を通して、何を自分は身に付けたのかを考える。それが振り返りということである。よくある45分の授業の中で、もう時間がないからまとめると言って先生が板書して、ノートを取りなさいと。これは画一的なまとめ。今はみんなこれでパシャッと写す。非常にこれも便利な使い方である。授業はここまでで良い。帰ってその板書の画像を見ながら、自分でもう一度授業を振り返り、自分の言葉でまとめることができれば自律的な学びとなる。何が分かって、何が課題なのかメタ認知できる。

一人ひとりの問いからどうしたら解決できるか、子どもが家庭学習で考えて学校に登校する。実際6年生の今の研究主任がやっているこのような取り組みは非常に素晴らしい。私はちょっと見せてもらったただけだけど、しびれるぐらいの実践をしていると思っている。

○常盤研究員：まさにそのウェルビーイングを目指してもらい、よりよい自分の人生の幸福、よりよい社会ということだが、それは多分ひとつの決まったスタイルがあるのではなく、個人によって様々な描き方があるので、そういう意味から言うと、一人ひとりの問いを大切に、いろいろな見方があるというところで知的葛藤を生じさせた上で、結論は実はバラバラになっていく可能性も当然あるだろうと思うが、どうしてもあるべき姿を考えると一つのところに収斂されていく可能性があると思う。つまり、人間力や社会力、これも理想というところに、定義や解釈ばかりをしてしまうと、一つのところに収斂していく恐れもあるので、今おっしゃったようなできるだけ多様性とか個性とかそういうものが含まれた形で、ぜひ定義をして欲しい。

○後藤座長：貴重なご意見をいただいた。私の気が利かなく、育むべき資質・能力ということで縛ってしまうと非常に発言がしづらくなってくるかと思うので、今日山下校長先生も参加していただいております、先ほどのご発表の感想も含めて、それこそ私どもの対話の中から、

いろいろなことが生まれてくるという感じもするので、どうぞ感想等も含め、研究員の方々からそれぞれご意見等を頂戴したい。

○木幡研究員：今お話があったように定義を社会力の定義としてしまうと画一的になっていくというのは、確かにその通りではないか。ただ、どこかで子どもたちには、学びの大きな目標というところは大事だと思っている。大学でも学生で経済知識とかそういうのを身に付けてくると、学生がFXなどにちょっとした興味をもち、経済知識とかそういう経営知識を活かして、お金儲けしようという学生が出てきたりする。儲けるための知識・技能というのはそこで身に付けることはできるかもしれないが、それは世の中のためになっているか、社会に貢献することに繋がるのかというところだと思う。大学もそうだし、学校としてはこの世の中にどう役立っていくのか、人のためになるのか、そういったところの大きなものをおいておかないと、ただただ知識が個人的な利益とか、自分だけよければいいというように使われてしまう。細かい定義は確かにすごく画一的になって難しいかもしれないが、そうならないように、やはり、どこか大きな人間力、社会力というのはおいておく。ただ学生たち、子どもたちに考えて欲しいのは、世の中の人々がどうハッピーになっていくのか、どう役立っていくのかというところで、やはり大事にしたい。教員としても、学生に問いかけた部分でもあるし、人のためというところ、どう役に立っていくのか、学んだことの技法・技能・テクニックというところと、それが社会的価値とか人間の社会構成の中で、貢献する中の一部として自分がどう参加できるのかということは、一個おいておかないと先生たちも多様性、個性となってくると、非常に混乱してくる。やはり世の中にどう貢献できるのかというところは一個必要なかと思った。

○後藤座長：キーワードとして、確かに社会貢献のためというのがあるかと思う。

○宮崎研究員：山下先生のお話を非常に興味深く聞かせていただいた。先ほどおっしゃった自分の思考を客観視する、メタ認知能力とか、学びの動機付けというところは本当に生涯学び続けるためのスキルと言ってもいいかと思っていて、それを義務教育中で養っていくというのが非常に大事になると思うので、そういった時に非認知スキルというのか、そういったところを伸ばしていくために、今までの教え込み型よりは、必要なときに支援する、支える教育にシフトしていくというのが大事だと思った。

資質・能力のところと言うと、先ほど事務局からウェルビーイングという話もあったが、資料4の5ページにある、学びに向かう力というところでは、どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を送るかということである。人生100年時代の人生設計、ライフプランをそれぞれの子どもがしていくにあたり、地域社会や世界と常に関連付けて考えていく中で、課題を発見し、解決していくというような習慣をつけていくことが学校教育の中で養われていければと思った。最後にスクール・コミュニティというところに話を繋げられたので、GIGA スクール構想の全市展開により、地域の生涯学習活動のネットワークが広がって三鷹市全体のまちづくりに繋がっていくというような話、その辺のところをもう少し聞きたかった。

○後藤座長：貴重なご意見をいただきました。他の研究員の方、どうぞ。

○阿原研究員：本当にこれを見ると、三鷹市の子どもたちがこのように育ってくれたらいいと思うが、全ての子どもたちがやっぱりこのように目標とするものに向かっていけるとは限らず、必ず好奇心がある子は伸びるとは思うが、その中で、やはりついていけない子どもや、気持ちはあっても自分から表現できない子どもが実際にたくさんいると思う。そういった子どもたちがこういう中で取り残されていかないかというのがすごく心配で、取り残されていってしまう子どもたちを、どう先生方がこういった授業の中でサポートしていってくれるのかなと、私としては、保護者の立場として思う。先生方の負担も大きい。1人の担任の先生が全ての子どもに出てきたものに対して一つ一つ返していくのは本当に労力が必要で大変だと思う。その中で、多くの子ども、好奇心がある子どもはたくさん意見をくれる。でも意見を出したくても、それができない子どもも、今の子どもたちは多いと思うので、そういう言葉たちを先生が見つけて声をかけてあげられるようなサポート体制というのがあったらいいと思う。それには担任の先生1人が35人から40人という子どもたちを見るのがとても今の状況ではきついのではないかなと感じる。公立の小・中学校は本当に子どもたちの能力は様々で、色々な子どもたちがいるので、その子どもたち全てに目を向けるというのは本当に大変だと思う。サポートできる体制があったらいいなと保護者の立場から思った。

○緒方研究員：先ほど、柴田研究員から、ご指摘があったように、本来シュタイナー教育的な授業は、対面で対話しながら、ゆっくりと探したり伝えたり描いたりという、ゆっくり時間とふんわり雰囲気とを共有する特徴があると認識していた。

ところが、タブレットというIT機器を使っても、そうした掘り下げや遠隔探査といった「探究」機能や、シュタイナー描画の特徴の一つである「グラジュエーション」機能も、より精細に微妙な表現を出来るなど、実に感動的なことだと感心した。

実は探究学習の中の一つの例で、今企業もいろんな社会貢献として探究学習を支援している。鹿島建設も高校生のカリキュラムを色々なところで実施している。東京駅の丸の内駅口が昔の大正時代のデザインに変わった。屋根材の瓦が、実は石巻の瓦である。復旧・復興事業で石巻のあたりが実は鹿島建設で、その復旧から復興になって最初に取り戻したのが瓦職人だった。ところが売れる先がない。そこで同じ鹿島建設の繋がりがあって、東京駅で使われた。丸の内のあるこの瓦が石巻であると世界からこれを見にくる。日本中が見に来る。そこにこれが復興の瓦なのだと考えている。これも瓦を見るというところからずっと引っ張ると、東日本大震災の復旧・復興までくると、いろんな方たちが関わってそういう目に見える形でできたという話もされている。やはり民間の方がそういうことは非常に社会的な希望として大きく取り組みをされているので、ぜひこういうコンテンツ題材・話材を探して取り入れていただければと思っている。

それから、先程、外国の方が来るという話があった。三鷹はメッキ冶金業の方が多く、メッキのところに来ている外国の方は、ボリビア、チリ等南米の方である。そして、家族がこ

られ、お子様たちが学校に通われている。三鷹国際交流協会（MISHOP）が大変頑張られ、そのお母さんに日常会話を教えている。そこでPTA用語も教えたが、一番最初に教えたのは、「私は役員になれません。」であった。こういうこともとても大事な関わり方だと思う。

それから伝統的な阿波踊りが今年も中止になりそうであるが、ソーラン節だとか演舞だとかいろいろなものがあるので、体育祭、運動会するときだけではなく、やはり日頃から、そうした身体訓練が、実は健康の基盤になる。しかもそこに伝統が活かされるということを実現できればと思っている。

それから災害時のことであるが、先だって富士山のハザードマップがまた改定されて、溶岩流がこれまでの2倍に出るということから、溶岩流が4日5日かかって相模原市の緑区までくると。つまり相模川のところまで全部流れてくるということがわかった。前はいわゆる降灰のことを申し上げたが、この30年間に起こり得るいろんな災害に対しては施設だけではなく、ご自分の家庭や家族のことなども含めて必ず取り入れるということ、まさに探究していければと思う。

最後に今、ついていけない、表現ができないという子どもたちだけではなく、昨日、NHKでも取り上げていたヤングケアラーという、家へ帰って、高齢者の方の介護をしなければいけない子どもたちがいるという現実がある。それから、外見は全然大丈夫だが、発達障害ではなくて、内臓や何かの内部障害を抱えていて、うまく勉強ができない、対応できないとか、やはりこういう一人ひとりの個のところにも、事情を合わせ、ではタブレットならこういうことができるよ、介護のことで心配だったら相談できるよ、というようなこと、家族も含めて、問題解決にタブレットが活かせるということまで、ぜひ掘り下げていただければと思っている。

○後藤座長：新たな視点でのご意見をいただいた。

○相馬研究員：現場でやる場合は、一人の百歩よりも百人の一步が大事だと考える。土日まで、たくさん思いでやらなければいけないというのは、やはりちょっと問題があるかなと思う。これは私が、最初の頃からずっと言ってきたことだが、今の三鷹の子どもたちの現状というものをしっかりと捉えていかなければプランというのも立たないのではないかなと思う。ビジョンが次々と出ていたが、素晴らしい内容がたくさん出ている。しかし、現実になんかということを考えていかなければいけない。事務局の方をお願いして、第五回的时候に資料をいくつか出してもらった。やはり、しっかりと深掘りして、今何が三鷹の子どもたちの課題なのか。例えば不登校の問題、いじめの問題、また自殺の問題に関わってきたが、三鷹の子どもたちは、不登校の方が確かに少ないが、病気で休んでいる子どもたちが非常に多い。とすれば、この一人ひとりがどういう病気なのか、なぜその病気の子どもたちがこれだけいるのか、ということをしつかり見ていかなければいけない。それがなくて、一人ひとりを活かした教育、一人ひとりを大事にするプランというのも生まれてこない。また、さらにいじめの問題等も、小学校のレベルで考えたとしても、例えば東京都の方でも小学校のいじめ問題そのものを積極的に発見していこうという捉え方をしている。三鷹市の小学

校でのいじめ認知率が低い、これが現実であるならすごくよいが、やはり本当に数字が実態に合っているか、を点検して、どのようなチェックをしてこの数字が出ているのか。そこをやはり見ていかないと、一人ひとりを大事にする教育というのも出てこないのではない。現状の状況をやはりしっかり分析して、そこから何が見えるか。それで次のプランが出てくると感じる。

○後藤座長：現状からの確認という大切なご意見をいただいた。

○佐藤研究員：山下校長先生から算数から取り組まれていると伺ったが、楽しい授業があると学びたい意欲がどんどん広がっていき、学校に行く楽しみも広がっていくだろうと思って聞いた。目指す子ども像のところ、私がひとつ思っていることが生活力をつけることだろうと思う。小学校へカウンセラーとして行って様子を見てみると、タブレット等、子どもはすぐ使えるし、私の方が教えてもらうような感じである。本当によく使いこなせていると思うが、一方で、ものすごく不器用な子がたくさん増えているという印象がある。生活が便利になっているので、手先を使うなど、器用さというのは必要なくなっていくのかもしれないが、自分自身の身体の使い方とか指先の使い方というのが経験不足もあり、体験的につかめていないのではないかと。ある程度の器用さというのは生活の質というところでも、例えば服を着る、ボタン、チャックをしめるなど、すごく関わってくると思うので、具体的には、まだ思いつかないが、身体や指先の器用さについて、三鷹ならでの取り組みができるとすごくバランスが取れるのではないかと思っている。

○柴田研究員：目指す子ども像、人間力と社会力を兼ね備えた子どもの育成というところで、私はやはりここでは資料の3ページの左側にあるようなヒューマンスキルということがどの子どもにも、もちろん教員にも必要なスキルだと思う。ここには、他人を思いやる優しい愛情を注げる勇気や豊かな感性というふうにあるが、これに関わって、東日本大震災後によく「レジリエンス」という言葉を耳にする。何か困難に直面したときに、しっかりと自分自身も含めて自分の周りを立て直す力というものが、これからの時代を生きる子どもたちには特に必要なのではないかと思う。うまくいっているときは、それはそれでいいけれども、例えば私は学生をいろいろ見てきたが、今まできっと親御さんが何も心配なく育ててきたであろうお子さんが、例えば就職活動で初めて困難に立ち向かって、精神がポキッと折れてしまったり、例えば教員になってもイメージと全然違ったと言って、本当に短期間で学校現場を辞めてしまう、そういう若い方たちがたくさんいる中で、やはりこの「レジリエンス」という力が必要になってくるのではないかと思う。

昨年、三鷹市の若手の先生を対象とした研修を担当をして思ったことであるが、ある教員が、「毎日学校がつらくて朝起きると知らない間に涙がこぼれていた。でも周りの先輩の先生方が、上手くコミュニケーションを取ってくれて、支えてくれたので、そのとき自分が辞めないで済んで、今がある。」ということを書いてくれた若手の先生がいたが、まさに例えば自分が余裕があるときには、周りに優しい愛情をしっかり注いであげられるというような人間像や、何か自分が困難にあったときには周りに素直にヘルプを出すことができるよ

うな表現力とか、そういったことが求められていると思う。いじめの問題についても、そういった子どもたちのコミュニケーションがうまくいっていると、例えばいじめを見て見ぬふりをするお子さんというのがいなくなるのではないかと思う。ここに掲げられているように他人を思いやり優しい愛情を注げる勇気というようなものを発揮できる、そういうお子さんを育てていけたら、社会全体もよくなるのではないかと思った。

○後藤座長：皆様から貴重なご意見をいただいた。他に委員の方よろしいか。

では、私から一言だけ。先ほど木幡研究員から、評価のあり方、フィードバックについても話されていたが、確かに大きな課題としてある。子どもたちの視点からいくと、今度子どもたちにも、自己評価であったり、総合評価の学習場面が必要であろうし、その中で、子ども自身の自己評価能力を高めていくということも非常にキーワードになるかと思って、意見として述べさせてもらった。

○貝ノ瀬教育長：それでは最後に、私も少し話させていただくが、今日のメインは東台小学校の山下校長先生からのプレゼンで、異口同音に、素晴らしい実践、そして見識を示されたこと、本当に私も嬉しく思っている。本当に感謝申し上げる。同時に、やはり山下先生のプレゼンは子どもの学習を中心に発表されていたので、いわゆるその子どもの丸ごとを見て、そしてこれを例えば1人1台タブレットをどう活用するかとか、個別最適化ということについて、学習面ではなくて、昔で言えば生活指導とかそれから人間性育成にどうそれを活用するか。文科省のこの資料の4の5ページ、この三つの柱、能力。結局その目的というのは、最終的にはこの学びに向かう力、人間性なんだと。人間性つまりこの人格形成、三鷹で言えば人間力、社会力になるが、それがゴールで、そこにはやはりどのように社会、世界と関わり、より良い人生を送っていくのかということがそこにセットになっている。その基盤として知識・技能で何を理解しているのかとか何ができるのかとか思考力、判断力、表現力とか、そういうものが基盤になっていなくてはならない。これは文科省の方でもう出している。やはり、OECDのコンピテンシーの2030プロジェクトを持って出された内容であるが、そういう意味では三鷹の方も同じような方向で考えているということは、これで間違いない。同時に、今日、様々な方からご指摘のあった、やはり子どもの貧困の問題とか、いじめとか不登校とかそういう生活力の問題とか、丸ごと子ども自身をどう見ていくのかと。

評価の仕方としては、ただ狭い意味の学習の道具としてのタブレットではなく、人間を丸ごと、一人ひとりが自分の力で、本当に豊かで、幸せな人生をどう送っていけるか、自分の力で飯がどう食っていけるのかというようなこと、心を見失わないで、しっかり生きていける、そういうこともどう育てるかということでも、やはりタブレットはこれから大いに活用されるべきだと思う。ですから同時に、この一人ひとりのいわゆる個別最適化という中には、その子どものつまずきや、いろんな課題、問題、生活上の問題も含めてどう先生が発見していくのか。また、そういう子どもたちを、どう丸ごと理解するのかということでの道具としても使うということを開発していく必要があると、今日は本当に学ばせていただいた。

今日は学習の面での集中的なテーマで入ったが、やはりもっと広く考えていく必要があ

る。三鷹もそういう意味では、まだ深掘りしていないので、今年度、その辺についてはもっとしっかりと、丸ごと一人ひとりの子どもの理解とその課題、そしてその対応についてもっと肉づけをしていきたい。今日は、山下先生はもちろん、研究員の皆さんのご発言に大変に感銘を受け、今年度しっかりとやろうと思った。感謝を申し上げたい。

○秋山教育部長：先生方のご議論を伺い大変勉強になった。私自身も勉強好きではなかったということもあるが、それは、人はなぜ学ぶのかとか、勉強の仕方とか、多分そういうことを学んでこなかったということがあるのかと思っている。今日いろんなキーワードをいただいたので、さらに事務局の方でも整理して議論につなげていきたいと思う。お話の中でも市教委のサポートも必要であるというご指摘等もあったので、まだまだ議論の方は深めていく必要があると思うが、こういった議論をしっかり受け止めながら、教育委員会としても取り組んでいきたいと思った次第である。

6 事務連絡

○事務局：資料の5、今後の予定について、本日、第7回の研究会でこの後今のところ12回までということで、後5回予定をしている。次回は、5月11日火曜日17時から19時、今度場所が変わり三鷹ネットワーク大学の方になる。主な内容としては、今日の資質・能力についてのところ、これをある程度固めていきたいので、そこについてご議論いただこうと思う。先ほどの二つ目の議論として、理想の学園・学校の具体化ということで、ソフト面ハード面から、これからの子どもたちが学ぶ学校としてどんな施設が必要となるのか。特にスクール・コミュニティの観点であるとか、個別最適な学びというのはどんなものが必要とされるのかといったことについても、ご提言いただければありがたい。第9回は6月22日火曜日ということで予定をさせていただき、10回、11回、12回については、この後また皆様の予定を聞かせていただきお示しする。最終的には、研究会としての最終報告を作成していく。特に11月6日に、三鷹教育フォーラム2021を実施する中で、これからの三鷹の教育について、全国に向けての発信というものを考えている。そういった意味でこの研究会の報告というのは非常に大きなものになる。その前にこの研究会の最終報告については、教育委員会か市議会での報告があるので、8月中旬までという非常にタイトなスケジュールであるがご協力をお願いしたい。

○後藤座長：それでは本日の会議を終了する。